千曲川旅情の歌

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべは萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて
麥の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

小諸なる古城のほとり　雲白く念い沈みぬ
　雪嶺の裾の岡辺に　緑なすハコベは萌えず　若草も座すに足らずや
暖かき光はあれど　野に満る香りもなくて　鈍く光れり雪解けの水
　旅人の群れの幾つか　遠くのみ春めきかすみ　麦の色わずかに青む
暮れゆけば浅間も見えず　歌哀し佐久の草笛　早々と往く畠なかの道
　濁酒にぞ愁をこめて　ちくま川たゆたう波の　寄せ返す岸辺の旅籠
　　しばし慰む浮寝の吾身

島崎藤村